

いま伝えておきたいこと

山崎世理愛

本号は、研究ノート・論文の計3本が掲載されており、海外を対象とした論考も1本含まれます。ここ数年は、日常的にお互いの研究について話したり意見し合ったりする機会が減ってしまったかも知れません。そんな中でも皆さんの努力のもと『溯航』が出版され続けているのは素晴らしいことです。また、現在では国内外の発掘や資料調査等が再始動していますので、今後はさらに多くの研究成果を拝読できることだろうと期待しています。

教員として早稲田大学に戻ってきてから約10ヶ月経ちました。懐かしいと思えるほど離れていたわけではありませんが、やはり院生部屋の雰囲気や皆さんの様子を見るとほっとします。それと同時に、以前とはちがう新たな視点からいろいろと覚えることもありました。ここでは、皆さんと同じく大学院生活を過ごし、また戻ってきて10ヶ月ほど経った今、伝えたいことを書き留めておこうと思います。まず今年度改めて思ったのは、大学院生が本当に自立して努力を重ねているということです。早稲田大学考古学研究室の特徴として、（良くも悪くも）自由度が高いことが挙げられます。私自身もこの自由を謳歌しました。しかし、自己管理をしっかりとしていないと、すぐにだらけてしまい、論文などの締切に間に合わないということもあり得ます。大学院生の皆さんは、自由という名のもとでしっかり自身をコントロールしていく責任があるのです。そして自由だからこそ、個人の努力や姿勢が研究に直結するという面もあります。経験上、この環境でやっていくには「人に聞く力」が大切ではないかと思っています。私も皆さんと同じく、これまでテーマの方向性で悩んだり、なかなか分析がうまくいかなかったり、四苦八苦しながら研究や論文執筆に取り組んできました。そんなとき、思い返せば突破口となったのはいつも周りの人からの助言でした。たった一言がきっかけになることさえあります。授業やゼミという与えられた機会だけでなく、意見や助言を自ら求める姿勢が重要だと思っています。根拠のない自信やプライドを少々持ちつつも、自分の研究を進展させるための貴重な機会（特に飲み会を指しているわけではありません）を失わずに、自ら取りに行くことが必要なのだと感じています。自由であるがゆえに孤独を感じてしまうこともあると思います。ときには孤独にひたすら頑張らなければならないこともあるでしょう。でもどうか、そのタイミングを見誤らないでください。もちろん、何も調べず考えずなんでもかんでも聞いたら良いわけではありませんが、「こんなこと相談したらどう思うかな」と悩んでいるなら聞いたほうがいいです。甘えだとは思いません。そうした積み重ねで、今は相談すべきか一人で頑張るべきか、そのうち判断できるようになるはずです。

最近改めて思うもう一つのことは、大学院生の図版作成技術の素晴らしさです。図版は、読者に論文の内容を的確に理解してもらうために大きな役割を果たしますし、考古学では特に地図や遺構・遺物などの図が重要であることは言うまでもありません。皆さんの多くがそれを意識し、努力を重ねているのだと推察します。しかし、美しく見やすい図版がたくさん掲載されていても、文章や構成、内容自体がそれに見合っていないければ、とても勿体ないことです。今から問題設定・資料集成・分析・考察までの一連をしっかりできるようにトレーニングを積んでおくことが重要だと思っています。特に問題設定に関しては、比較的軽視されてしまっているように感じますが、実は研究・論文の質を左右する非常に重要なステップとして位置付けられます。問題設定や仮説が弱いと帰納的になってしまい、分析結果をうまく回収できなかったり、論文にした際には意義や新規性が読者に伝わりにくくなってしまいます。若手研究者がまず目指すべきなのは、先行研究をもとに立てた問いに対して、客観的なデータ・分析によって答えを導き出すという基本ができるようになることだと思います。確かにベテラン研究者の論文の中には、帰納的に書いていても明快で、有意義な指摘や新たな発見もしている素晴らしいものが存在します。しかし、私たちはまだそこには到達していません。基礎もできていないのにいきなりそんな論文は書けないのです。月並みな言葉ですが、やはり基礎こそ大切で疎かにしてはいけないのだと思います。

ここまで自戒の念も込めて書いてきましたが、さいごに最も伝えたいことで終わりたいと思います。それは、研究を楽しむということです。8年ほど前、ある大先輩に「研究で泣くくらいならやめたほうがいい、楽しまなければ意味がない」と言われたことがあります。日々の課題に追われ楽しむことを忘れていないか、ぜひ自問自答してみてください。新任教員の若手研究者がこんなことを言うと甘いと思われてしまうかも知れません。でも、もう少しこれを信条にやっていきたいと思っています。どうか皆さんも研究を楽しみ、成果をかたちにしていくことを心から祈っています。